

## 令和4年度北海道教育大学札幌校へき地校体験実習報告会



札幌校 加藤雅子アドバイザー



修了証書授与

10月28日(金)、令和4年度の「札幌校へき地校体験実習」報告会が行われました。

コロナ禍は今年度も引き続き、一向に収まらない状態でしたが、当初計画した13校で33名の学生が全員無事に実習を行うことができました。コロナはむしろ感染拡大が続いている時期でしたが、昨年度、一昨年度のような延期や中止はなく予定通りに行われました。体調管理や、感染症対策などに対して、参加学生の意識も高まってきたこともあってか、体調面による不参加や実習中断は一件もなく、それが何よりであったと感じています。受入校や各教育委員会のご協力はもとより、関係各位のご理解やご支援をいただいたことに感謝申し上げます。

事後指導・実習報告会も主に対面で実施することができましたが、今年度もZoomを併用しました。実習受入校にもZoomでの参加を呼び掛け、数多くの実習校にご参加いただき、会の中でコメントも寄せていただくことができました。このことは学生にとって大きな励みになったようです。

今年度のへき地校体験実習には、洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校、黒松内町立白井川小学校、積丹町立美国小学校の3校が今年度から受け入れです。

従来からの受入校はもとより、新規受入校も各学校・教育委員会の非常に協力的なバックアップの下、へき地校体験実習の一番のネックである宿泊施設の確保を含めて、細かなところにも気を配っていただき、大変スムーズに実施させていただきました。ありがたい限りです。

報告会は、はじめにへき地・小規模校教育研究センターの川前あゆみ副センター長にご挨拶をいただき、前半7校、後半6校の計13校の発表の後、川前副センター長と前田賢次准教授から講評をいただきました。また、当日、釧路校から参加した荒川浩一アドバイザーからも感想を伺うことができました。更に特筆しておきたいのは、この報告会に多くの受入校がZoomでご参加くださったことと、その内

2校の教頭先生からコメントをいただくことができたことです。最後に実習生全員に「へき地教育プログラム修了証」を手渡し、終了しました。

今回の13校の発表の中で、複数の学校で共通して触れられていた内容をまとめてみます。今回特徴的だったことのひとつは、2年生の実習生の多くが教壇実習を体験することができたということです。中には3回も実践することができた学生もいて、充実ぶりが窺えました。体験実習ということで、観察実習中心で1週間過ごすだけでも貴重な体験ではありますが、教師の基本は授業であり、それを実践できるということは、たいへん大きな学びになることが、学生の報告を聞いてもよくわかりました。短い期間の中で、指導して下さる担当の先生方の負担もある中、ありがたい限りです。

一人ひとりの子供との関りを大切にし、児童生徒理解に努めることの重要性を感じている学生が多くいました。「もう一度行きたい!」と思っても、いざ4年生になると他の実習などで行けないことが多い中、これだけ多くの学生が日程をやりくりして参加したことは驚きでもありました。どの学生も、1度目の経験を踏まえ、実習で学ぼうとしている内容もレベルアップしていて、もうすぐ実際に教職に就くという心意気をもって取り組んでいました。できればこのように2年次と4年次の2回参加して自分の成長を感じながら、より高い目標にチャレンジできるのがベストだと言えます。

へき地校体験実習による最大のメリットでもある「教職への意欲の高まり」は、今年度も多くの発表から窺うことができました。「『教師になりたい』と強く思うようになり、新たな目標ができた。」と話す学生も複数おり、例年の事ではありますが、小規模校で子供と密に関わる良さが意欲の向上へとつながっていると思われます。また、札幌校は札幌など都市部の出身の学生が多く、自分の育った環境と比較することで、視野を広げることができたという発表も

目立っていました。

たった5日間の滞在にもかかわらず、実習生通信や最後に手渡された子供たちからの手紙からは温かな交流の様子が観られ、改めてこの実習のいい意味での「濃さ」を感じることができました。良い実習であればあるほど、子供たちとのみならず、教職員や地域の方々と濃い関わり合いこそが、学生の特難い経験となります。改めて「へき地校体験実習は密なんです！」と伝えたいです。(今年度の夏の甲子園大会優勝校仙台育英の須江監督の「青春ってすごく密なんです。」という言葉を拝借した。)

副センター長の川前先生からは「この実習をひとつのきっかけとして、出会った子供たち、先生方、地域の皆様に何らかの形で恩返しができるように、これからも学び続けていって欲しい。」という言葉いただきました。

続いて、釧路校から参加していただいた荒川アドバイザーから「今回実習に参加して、『自らの身の丈を知ることができた。』という言葉が印象に残りました。それによって次の一歩が踏み出せるという、大変いい言葉として、釧路校の学生にも伝えたい。」と話していただき、へき地校体験実習では教職への足掛かりとなるだけでなく、人間的

な成長にもつながっていくということに気付かせてもらい、多くの学生が頷きながら聴く姿が観られました。

また、今回はZoomでご参加いただいた実習校が昨年と比較で倍増しました。その中から、白井川小学校教頭の赤松先生と大滝徳舜警校前期課程教頭の立石先生より、感想と励ましの言葉をいただくことができたことも、学生にとって大きな励みになりました。心より感謝申し上げます。

締めくくりに、札幌校の前田賢次先生から「今回、たくさんさんの学びを授けてくれた実習先の学校や子供に、皆さんが何を返せるのかを考えてほしい。皆さんは1週間の滞在だったが、実習先の子供たちは今もへき地校での日常を毎日過ごしている。北海道にはこういう子供たちがたくさんいる。そのことに思いを馳せながら、どういう教師になりたいか考えてほしい。」と講評していただきました。

最後に「へき地教育プログラム修了書」を一人一人に手渡し、今年度の報告会を終了しました。今年度もコロナ禍が続き、常に対策が求められる状況でしたが、すべて予定通り実施できたのは学校や教育委員会、地域の方々等のご協力のおかげです。学生の学びの場を提供していただいた関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

## 令和4年度北海道教育大学釧路校へき地校体験実習報告会



釧路校 荒川浩一アドバイザー



報告会の様子

8月末にスタートした令和4年度のへき地校体験実習は11月中旬に、予定されていたすべての学校での実習が終了しました。コロナ感染の心配は実習期間全体を通してありましたが、特に大きな問題もなく実施できたのも、実習の意義をご理解の上、丁寧なご指導をいただいた受け入れ各校及び各市町村教育委員会のご協力によるものです。心から感謝申し上げます。

釧路校では、大きく「実習Ⅰ(2年生対象、1週間)」と「実習Ⅱ・Ⅲ(3、4年生対象、2週間)」のそれぞれが時期をずらして実習を行います。いずれも実習校及び参加者が大きく増えました。その関係もあって、すべての実習が終了した12月に行う報告会を実習Ⅰは3教室、実習Ⅱ・Ⅲ

を2教室で分散同時開催によって行うとともに、いずれもZoomで各実習校の参加もいただけるようにしました。学生の講義の関係で、退勤時間を過ぎてからの開催となってしまったのですが、多くの実習校の参加をいただくことができました。学生にとって大きな励みになったことは言うまでもありません。本当にありがとうございました。

この報告会は、実習校の特色ある教育活動や実習の成果・課題を交流するなかで、へき地・小規模校教育の現状理解と実践的な力量を高めることを目的としたものです。成果については共通する部分も多く、あらためて学んできたことを確認できたとともに、他の報告から新しい発見もあり、学びを広げることができたとの声が聞かれました。



今回は初の試みで、進行も学生によって進められ、活発な質疑もあり、多くの実習生が口にした、へき地校ならではの「主体性」の大切さを感じられる、生き生きしたものになりました。

実習Ⅰ報告会では18校、36名の報告が行われました（昨年度は10校23名）。実習Ⅰは観察実習が中心の1週間という短い期間でしたが、授業や休み時間での子供たちとの触れ合いや、宿舍生活の様子などを生き生きと伝えてくれました。

伝えたい内容がたくさんあるにも関わらず、8分という短い時間での発表でしたが、それぞれが苦勞して学び、今後の大学生活のために得られた課題をしっかりと伝えてくれました。教壇実習を経験させていただいた学生もいました。1週間という期間、指導案を書いた経験もあまりなく、ましてこれまで授業の経験はほとんどないだけに、「かなり緊張した」、「大変だった」と報告する一方、授業を経験したどの学生も、やり遂げた充実感を感じたという心境を聞かせてくれました。「うまくいかなかった」と反省する一方で、「もっとうまくになりたい」と次への意欲を語る学生がとても頼もしく思えました。また、実習で児童や生徒にパワーポイントを使ってプレゼンテーションを経験した学生は、この報告会でもその学びを生かし、しっかり成果として発揮していました。

週に一度のフィールド実習に加えて、一週間一日中、連続して実習を行うことから、授業以外での教師の姿を目の当たりにし、「学校で働くことの喜びを感じるとともに、勤務の大変さも実感できた」という声が聞かれました。そのうえで「教師になりたいという気持ちが強まった」と力強く語る姿が実習の成功を表していました。

この実習が、あらためて自分と向き合う機会になったことは、自分の課題を知るとともに「良さ」を発見できたと報告する学生が多かったことからわかります。

実習後に今後のことについて語った学生の言葉に次のようなものがありました。「今までは学ぶのは子供たちで、教えるのが教師だという考え方だったが、教師を行う上で『学び続ける』ことが大切だと学んだ。」実習の事前指導の段階から、「子供との距離感」を課題として挙げる学生が多くいました。連続してまとまった期間、子供達と接することにより、授業での接し方、遊んでいる時の接し方など、助言を得たり、自ら試行錯誤したりしながら自分なりの感覚をつかんだことが窺えました。

3、4年生が対象となるへき地校体験実習Ⅱ・Ⅲ（以降「実習Ⅱ・Ⅲ」）の参加者は24名（昨年度16名）。昨年度は4年生の参加者は2名のみでしたが、今年度は8名で、実習Ⅰで感じた課題をさらに追究するために参加を希望した学生もいます。

期間も2週間となり、内容も「教壇実習」がメインとなることから、より深く学んだことがうかがわれ、語る言葉にもとても力のこもった、聞きごたえのある報告会となりました。実習参加者の多くが参加理由としてあげたのは「複

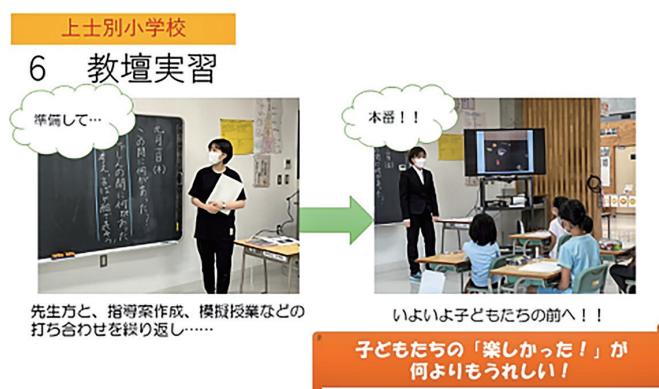
式授業を経験してみたい」ということでした。そして実際経験した学生全員が「間接指導」の難しさについて報告していました。

間接指導を成立させるための直接指導時の明確な指示などについて、机上では学んできたものの、実際に授業をしてみると、「わたり・ずらし」のタイミングは、教材や子供達の実態によって違うこと、そのために子供個々の見取りがより重要であることなど、多くの発見がありました。主免実習を終えたばかりということもありその比較から多くを学んだという報告もたくさんありました。「間接指導の充実を図っていくと、結果的に主体的な学習をファシリテートする能力が向上することにつながり、そうした力は複式に限らず、単式でも活きると感じた…」等、自分の成長を実感したというコメントがとても多く聞かれたのも印象的でした。「自分の成長…」という不遜な印象を与えそうな気もしますが、こうした学生に共通するのは自らの課題もしっかり把握するとともに、謙虚に学ぶ姿勢を持っているということ、強く感じました。今回の報告会は教室を分散して行ったために、昨年度に比べて一つ一つの教室のボリュームが小さくなったものの、それぞれの発表に質疑応答を加えたことで、より活発な報告会になりました。発表者も「伝えたい」という気持ちが発表方法にあらわれ、フロア側もそれに応えるように感想や質問を投げかけていました。司会進行の学生たちも、時には的確な感想を交えながら会をすすめてくれました。実習Ⅱ・Ⅲの報告会で進行係の一人が報告会の締めくくりで語った一言を紹介し、「報告会」の「報告」を閉じます。「…私たちは大学で学んできたことを、今回の実習でつなげることができました。これからもお互いしっかり学び続けましょう！」

# 令和4年度北海道教育大学旭川校へき地校体験実習報告会



旭川校 伊端俊紀アドバイザー



報告会のスライド

令和4年12月17日（土）、北海道教育大学旭川校にて、「令和4年度旭川校へき地校体験実習報告会」を開催しました。

今年度もコロナ禍でのスタートとなり、学生達の感染等による実習受入校への影響がないように、様々な対策を行いました。学生達は普段以上に感染対策に気を配り、我々もできる限りのことを行い、実習直前段階から実習終了まで、58名の実習参加学生から一人の感染者も出さずに、無事に実習を行うことができました。これもひとえに、受入校や各教育委員会のご協力、そして関係各位のご理解とご支援の賜です。心より感謝申し上げます。

今年度は、上川管内と宗谷管内の28校に実習を受け入れていただき、士別市立温根別小学校、多寄小学校、幌加内町立幌加内小学校及び幌加内中学校の4校が旭川校の新たな受入校になりました。受入校と教育委員会には、例年と同様、手厚いご支援をいただきましたが、今年度は特に、今まで宿泊に使わせていただいた施設の閉鎖や改築などにより使用できなくなる事態になっても、教育委員会から宿泊場所を斡旋いただいたり、役場庁舎での宿泊を認めていただいたりしました。また、宿泊施設周辺からの通学児童生徒がいなくなり、スクールバスの運行がなくなったにもかかわらず、学生の通勤のためだけにスクールバスで送迎していただくなど、実習生の生活へのご配慮をいただきました。本当にありがたいことです。

報告会では、へき地校体験実習旭川校運営委員長の渥美伸彦先生にご挨拶をいただき、選ばれた5校の発表を行いました。選定されたどの学生も意欲的に発表準備を行い、自分たちが実習で理解したこと、得たもの、自分の課題、実習の楽しさ、気持ちや意欲の変化などを参加者に確実に伝えようと努力することができていました。また、オンラインで参加した「へき地教育論」受講生にも実習の良さや楽しさをアピールし、次年度の参加を促すことができました。

発表校は、へき地の三特性、授業、教職への意欲に絞っ

て内容をまとめました。

その中には、学校が放課後の児童生徒に学び支援を行っていることや、地域のお祭りへ学校として参加していること、そして地域住民が学校行事に積極的に協力していることに驚きの声がありました。また、地域にあるものを活かして子供達の心の成長を図る学校の意識や取り組みに感心する声もありました。このように、1週間という短い時間の中でも、学校と地域の関係性をしっかり感じ取ってきたことが伺えました。

その他、学生達が驚いたのは、児童生徒と教職員の親密さ・距離の近さでした。参加学生のほとんどは大規模校出身者であるため、少人数の児童生徒と先生方の関係が、自分たちの過ごしてきた学校と大きく違うことを理解したようです。児童生徒と教職員がお互いに積極的に関わって、それぞれいろいろな面や思いを理解していることに感心していました。

そして、その関係や相互理解を活かして進められる少人数による目の行き届いた授業や活動から、小規模少人数が利点であると理解してきたようです。

「へき地教育論」の講義での説明や動画視聴、へき地校体験実習事前指導での学びで、複式授業について、その大変さや難しさを理解していた学生ですが、協力校では、複式の授業が、いつも普通に行われていて、先生方のすごさや児童生徒が生き生きと授業に参加している姿に感心したようです。また、多くの学生が、児童生徒の学年の枠を越えた仲の良さにも驚いており、同じ学級に異学年が過ごすことや少人数の学校に対するイメージを大きくプラスに転換できたようです。

多くの学校で教壇実習を実施していただきました。授業観察でもかなり貴重な経験となるのに、多いところでは、4回も教壇実習を経験した学生がいました。当初は、ほとんどが2年生なので、教壇実習は学生に負担が大きすぎるのではという心配がありましたが、大変であったけれど、

実のあるものになって良かったという感想がほとんどでした。協力校には大きな負担となる教壇実習にもかかわらず、学生のために実施していただきました。ありがたいことです。

子供達から「先生」と呼ばれる不安を伴いながらの喜び、積極的に関わってきてくれる児童生徒との楽しい時間、拙い授業やアドバイスにでも、児童生徒が意欲的に応えようとしてくれるうれしい反応などから、教職への意欲がさらに高まったり、迷いなくなり教職への道を決めたりする学生が多くいました。また、教員の仕事の大変さを目の当たりにして驚きながらも、目の前の子供達の成長を身近に感じ、それに関われることが、大変さ以上に素晴らしいことだと感じている学生も多くいました。

最後に、へき地・小規模校教育研究センターの川前あゆみ副センター長から講評をいただきました。発表校それぞれ、へき地教育の三特性について述べていましたが、この三特性についてのこれまでの実践の積み上げやこれからの多様な学びへ向けての実践の積み上げの大切さについて、ご示唆をいただきました。また、冒頭の挨拶で渥美先生からもいただいた「省察」という言葉とともに、この1週間という短い期間であるものの、その中で得たものを活かして、これからの本実習などの学生生活を充実させてほしいというお話をいただきました。

この報告会は、現在、「へき地教育論」を受講している学生が講義の一環として、オンラインで試聴しました。受講生の感想からは、この実習に、先輩方が意外に軽い気持ちで応募し、楽しく、他では得がたい貴重な体験をしてきたことに、安心したり感心したりしながら、来年度のへき地校体験実習参加への意欲を高められたことがうかがえました。

今年度もコロナ禍での開催になりましたが、来年度も、これまで同様、皆様方のご協力をいただき、へき地校体験実習を実りあるものにしていきたいと考えております。これからもよろしく願いいたします。